

ICTを活用した教育体制構築に関する実証事業 報告書

1. 学校名
ジャカルタ日本人学校チカラン校
2. テーマ
オンライン授業の実践をふまえたICT活用
3. 取組の概要
(※報告書の内容を要約し、200～400字程度で記載してください。)
<p>本校の取組の1つは「オンライン授業事例集」の作成である。コロナ禍で通常の授業が行えなくなり、オンラインで授業を開始することになった。このような状況の中、自分達はどのようにオンライン授業を立ち上げたのか、まず何から取り組んだのかを整理することから始めた。互いの実践を共有し、振り返ることで今後のオンライン授業の課題や必要な環境整備が明確になると考えた。また、児童生徒、保護者、教員の三者に取組の前後でアンケートを行い、オンライン授業に関する意識を比較し、効果の検証を図った。</p> <p>取組の2つ目は、2学期からICT活用をテーマにした研究授業を行った。学校、家庭のどちらでも十分な学びを保障するためには、教師のICT活用指導力が不可欠であることから、情報機器の整備拡充を図るとともに、授業におけるICT活用の良さについて追究し、自身の指導力の向上をめざした。これらを「学習指導案集」としてまとめ、今後の指導に生かすこととした。</p> <p>以上、2つの取組を柱とし、本実証事業の成果を明らかにした。</p>
4. 取組の背景・目的
(※非常時でも途切れない「学びの保障」の在り方と関連づけて記述してください。)
<p>新型コロナウイルス感染拡大により児童生徒が登校して対面授業を受けることができずに新年度がスタートした。このような状況でも子ども達の学びを止めてはいけないとの思いから、手探りで4月からオンライン授業を始めた。本校は、昨年開校したばかりで機器類やネットワーク環境が十分に整っておらず、教員達はインフラに不安を抱きながら授業を行っていた。なんとか1学期は大きな学習の遅れは避けられたが、2学期に入っても赴任できない教員が日本から授業をしなければならなかったり、インドネシアにしながら家庭の事情で対面授業が受けられない子どもがいたりするなど、依然として厳しい状況が続いた。非常時でも学びを途切れさせないためには、教師自身の発想の転換が必要になった。ネットを介した学習の工夫や、子ども一人一人に対応した個別の学習への支援がこれまで以上に重要になった。そのためには、まずオンライン授業を安定的に行える環境が必要なことを痛感した。と同時に、日頃からICTを活用した授業を積み重ねておかななくてはならないことが明らかになり、非常時にも耐えられる教育体制の構築が急務となった。</p> <p>以上のような経緯から、本実証事業のテーマを「オンライン授業の実践をふまえたICT活用」とした。オンライン授業の実践をふまえ、非常時でも途切れない「学びの保障」を実現するための有効なICT活用について研究授業を通して明らかにすることを取組の目的とした。</p>

5. 取組の実施日程	
日程	取組内容
<1学期>	<p>①オンライン授業の立ち上げ 登校することができない状況でも児童生徒の学びを止めることなく、オンライン授業を行い、学習が遅れることがないようにする。</p> <p>②ICTインフラの課題を明らかにする。 オンライン授業を行う上で通信ネットワーク等、課題を洗い出し、教育体制整備に向けて必要なことを明らかにする。</p> <p>③オンライン授業のノウハウの蓄積 初めての試みであるオンライン授業だが、学年に応じた指導法を積極的に取り入れる。有効なツールやコンテンツを蓄積し、1学期末に校内でノウハウを共有する場を設けるとともに「オンライン実践事例集」としてまとめる。 ※別紙「オンライン授業事例集」</p> <p>④アンケート調査の実施 1学期末に児童生徒、保護者、教員の3者を対象にアンケートを行い、コロナ禍のオンライン授業について聞き取る。それぞれが感じたことや実態をふまえ、2学期の授業に生かす。この調査を2学期末にも行い、変容について考察し、本事業の効果の検証の一つとする。</p>
<2学期>	<p>①オンライン授業の継続と拡充 感染が拡大し、常用が厳しくなることに備えて、校内ネットワークを強化し、オンライン授業が安定的に行えるようにする。時数確保のため授業数を増やすとともに、優良なコンテンツを積極的に活用して授業の質を高める。</p> <p>②校内で研究授業を公開 「普段使いのICT活用」をめざし、全学年で研究授業を行う。対面授業、オンライン授業のいずれでも行える授業を基本とし、非常時でも授業が行える実践をめざす。</p> <p>③オンラインでの交流学习 コロナ禍で遠足や校外学習ができない状況をふまえ、オンラインで学校外の方々や他地域とをつないだ交流学习を行い、多様な学習ができるようにする。 社会科見学(小5)、職場体験(中2)、JAL航空教室(全)、CJSオンライン集会、バンドン日本人学校との交流集会、学習発表会の動画配信</p>
<3学期>	<p>①研究のまとめ オンライン授業事例集、研究授業の記録の修正と集約、本取組を研究冊子として製本する。</p> <p>②アンケート調査の分析と考察 児童生徒、保護者、教員の事前・事後のアンケートを比較し、本取組でどのような力がついたか、どのような変容が見られたか等を検証する。</p> <p>③成果と課題の総括 今年度の取組の成果を明らかにするとともに、困難な状況でも継続して授業が行えるような教育体制を維持するために必要な課題を明らかにする。</p>

6. 具体的な取組内容（※詳細に記載し、付属資料があれば添付してください。）

<1学期>

○4/23、4/24 オンライン授業 オリエンテーション

ZOOM を使って各家庭とつなぎ、ネットワークの状況を確認した。

校内ネットワークの回線容量の不足により、授業数を決め、ポケットwifiルーターを交代で使用 **資料1**

週に1回水曜日が課題配付日。保護者が学校まで取りに来る。

PC が用意できない家庭には、学校の PC を貸与した。

○4/27～6/26 オンライン授業本格実施

接続確認を経て、オンライン授業で学習を開始。ネットワークが不安定な時もあったが、軌道に乗せた。

一日に小学部2時間、中学部3時間の授業を実施。

○6/29～7/30 分散登校期間

オンライン授業と対面授業を交互に実施。小学部と中学部の登校を分散させた。授業時数を確保するため、小学部4～6年のオンライン授業を3回に増やした。

○～7/28 1学期のオンライン授業に関するアンケート調査実施(児童生徒・保護者・教員)

それぞれの結果をまとめ、2学期以降のオンライン授業の取組に生かした。

<2学期>

○9月初旬 校内ネットワークの増強

教員用ネットワークとは別に児童・生徒用ネットワークを構築し、増強した。複数学級同時に授業することができるようになり、動画や画像の提示にも耐えうるネットワークに安定した。

○8/24～ 分散登校で2学期開始 **資料2**

○9/10～ 週3回登校、週2回オンライン授業の分散登校

オンライン授業:1日あたり小学部1～3年3回、4～6年は4回、中学部は6回

登校日:小学部6時間授業、中学部7時間授業。

インドネシア国内で事情により登校できない児童には、自宅へ授業のライブ配信を行った。

○8/26 第1回校内研究会

本事業のテーマや取組について確認。1学期末のアンケート結果の考察

2学期以降の研究授業について検討。

○9/30～ 日本とのオンライン授業でWebカメラ使用開始

中学部英語の教員が赴任できず、日本からオンライン授業をしていた。音声は明瞭に聞こえるよう、また教室全体が映せるようWebカメラを購入し、授業で活用した。

○10/12 第2回校内研究会

2学期の研究授業の計画 書画カメラの使い方について実技研修を行った。

○10/13 小学部2年 まちたんけん(生活科)

学校近隣の施設を訪問し、働く人々へのインタビュー。デジタルカメラを購入し、児童が見学したことを記録する活動を行った。登校できない児童にも写真を通して施設の様子を知らせることができた。

○10/14 各教室にスクリーンを設置

資料やデジタル教材を大きく映して指導できるようプロジェクタとスクリーンをセットで購入。板書と併用できるように黒板上部から必要な時に引き出すことができるように設置した。

○10/19 オンライン授業で小型ウェブカメラの使用開始

オンライン授業の際、黒板や資料、実験装置など実物を映すための小型カメラを購入。各教室で使用が始まった。これまで限られた映像しか映すことができなかったが、授業の幅が広がった。

11/13 研究授業① 小学部2年 生活科 「つたわる広がる わたしの生活」まち
「まち探検」で発見したことを伝える活動を通して、地域のよさを身近な人に伝え合う楽しさに気付く。

※授業詳細は、別紙「学習指導案」参照

○11/23 CJSオンライン集会 資料3

一時帰国している児童生徒の家庭とチカラン日本人学校をつないで集会を行った。日本から24名が参加した。テレビ会議システムを利用し、体育館の大型プロジェクタで参加者の様子を映し出し、現在のCJSの様子を伝えるとともに、日本で学ぶ児童生徒の近況を報告した。突然、離ればなれになってしまった友達とオンラインで再会することができ、互いの励ましとなった。

○11/25 オンライン社会科見学 小学部5年

コロナ禍で現地見学ができないため、チカランのトヨタ自動車工場、日本で働くトヨタ社員とをオンラインでつなぎ、工場ラインをライブ中継で見学させていただいた。見学後、質疑応答も行った。

○11/27 GIGA スクール構想 1人1台のノート PC 配付

設定作業を行い、児童生徒に個人用PCを配付。まずは学校の授業で活用が始まった。

12/ 2 研究授業② 小学部5.6年 体育 「跳び箱運動」

台上前転をマスターできるように、ポイントを押さえて練習することができる。

12/ 7 研究授業③ 小学部1年 音楽 「せんりつで よびかけあおう」

曲を聴き、旋律の呼びかけ合いの面白さを楽しんで聴くことができる。

12/11 研究授業④ 中学部2年 社会 「ヨーロッパ人との出会いと全国統一」

大航海時代のヨーロッパ人の世界進出の目的と進出後の世界の変化について交流する。

12/17 研究授業⑤ 小学部3年 総合 「火事からくらしを守る」

社会科見学の発表動画を視聴し気付いたことを伝え、発表を修正する。

12/21 研究授業⑥ 小学部1年 算数 「どちらがひろい」

身の回りにあるものの面積を、直接比較や任意単位を用いた比較をする活動を通して、任意単位で面積を数値化して表すことの良さに気付き、様々なものの広さを比べることができる。

12/23 研究授業⑦ 中学部2年 英語 「Unit 7 Movie Dolphin Tale」

人やものについて、比べて説明することができる。あるテーマについて資料などを用いて比較して説明することができる。

○12/21～1/5 動画配信による学習発表会

今年度は体育館で発表ができなかったため、学年ごとに発表を録画したものを配信する形にした。期間限定で公開し、URLを保護者に知らせた。セキュリティに配慮し、視聴は保護者と親族に留めた。

<3学期>

○1/4 バンドン日本人学校と接続確認

両校のオンライン交流会に向け、教職員で接続確認。当初の予定は1/13だったが、感染拡大のため、2月11日に延期となった。

1/ 8 研究授業⑧ 中学部1年 理科 「力の世界」 身の回りの現象

力の大きさを比べるために、ばねとおもりを使った実験を行い記録することができる。

1 / 8 研究授業⑨ 中学部3年 数学「3年間の総復習」

必要な単元についてデジタル教科書を使って復習し、3年間の総復習ができる。

1 / 14 研究授業⑩ 小学部4年 算数 「面積の表し方とはかり方」

既習の長方形や正方形の面積を求める学習を活用して、L字型の図形の面積の求め方を考え、説明することができる。

1 / 18 研究授業⑪ 小学部4年 図工「からだで かんしょう」

美術作品の形や色のおもしろさに気づき、自分が撮った写真作品を発表することができる。

1 / 26 研究授業⑫ 中学部2年 国語「論理を捉えて」(オンライン授業)

筆者が「最後の晩餐」を「かっこいい」と思った理由について、根拠を明らかにできる。

〇2 / 11 インドネシア・バンドン日本人学校との交流集会

両校をオンラインでつなぎ、交流会を行った。自己紹介や学校の紹介などを行い、約30分の集会となった。これをきっかけに次年度以降、コロナ感染が落ち着いた段階で学校訪問を含めた交流を予定している。

〇2 / 22、23 オンライン授業参観(予定)

7. 取組の成果

(※どのような課題をどのように解決したかや、生徒・児童への効果等について詳細に記載し、成果物があれば添付してください。また成果がどのような観点で他の学校の参考になるかも記載してください。)

〇オンライン授業及びICT活用のためのインフラを整備することができた。

・ネットワークの増強

4月当初、ネットワーク容量が十分でないため、オンライン授業数が限られ、時間帯をずらして組まなくてはならなかった。動画やコンテンツを思うように配信できず、授業が滞る場面もあった。そこで、これまでの校内ネットワークとは別に授業用のwifiを設定した。それにより、小・中学部が同時に授業を行うことができるようになった。2学期に小学部4～6年が時数を増やし、3学期には小学部全学年が授業時数を増やすことができた。オンライン授業では安定したネットワークが不可欠であり、児童生徒がストレスなく授業が受けられる環境を整えることが学びの継続、深化につながった。さらに、一人一台のパソコンが配備されたことにより、教室で子ども達が自分のパソコンを使って学習する機会が増えた。子ども達が学習の道具としてICTを活用するための教育環境を整えることができた。

・情報機器の整備拡充

各教室にプロジェクタ、スクリーン、書画カメラ、Webカメラを常備し、必要な時にすぐに使える環境が整った。これにより、対面授業ではもちろん、オンライン授業の際もほぼ同様の指導が可能になった。例えば、導入前のオンライン授業の際、PC内蔵カメラでは資料や板書を映す範囲が限られ、教材提示に苦労したが、Webカメラや書画カメラを活用することで、教室での指導により近づいた。また、引き出し式のスクリーンを黒板上部に設置し、必要に応じてスクリーンとして使用している。日々の授業の板書とのバランスを考えたICT活用を心がけてきた。さらに、デジタルコンテンツとして算数のデジタル教科書を導入した。図形領域やグラフなどを扱う場面で、児童の具体物操作と念頭操作の間でつまづきを埋めるため、教師が操作して見せることができる点で有効だった。これまで教員が紙ベースで拡大印刷することが多かったが、その手間が大幅に削減されたことも利点の一つだった。急にオンライン授業に変更するような事態でも、デジタル教科書を用いることで教材を準備しなくてもすぐに授業を行うことができる良さもあった。

○オンライン授業の効果の検証

7月と12月に行ったアンケートからオンライン授業の有用性について評価した。

1. 児童・生徒へのアンケート

※詳細は「児童生徒アンケート結果(7月)(12月)」参照

次の5項目についてアンケート用紙に4件法で回答を得た。 ※上段が7月 下段が12月の回答

項目	そう思う	少しそう思う	あまり思わない	そう思わない
【授業の分かり易さ】 オンライン授業はわかりやすい所があった。	26% 26%	65% 59%	9% 11%	0% 4%
【協働の学習】 オンライン授業は発表しやすかった。	27% 19%	23% 26%	36% 37%	14% 18%
【家庭学習】 オンライン授業で予習・復習の時間が増えた	36% 55%	36% 11%	14% 30%	14% 4%
【授業時間】 オンライン授業の長さはちょうど良かった	48% 44%	17% 28%	22% 24%	13% 4%
【主体的な学習態度】 オンライン授業を通してできるようになったことや成長したと思うことがある。	26% 48%	30% 30%	35% 22%	9% 0%

【授業の分かり易さ】

肯定的な回答をした児童生徒がいずれも85%を超えた。オンラインの持ち味を生かし、各教員が創意工夫して授業づくりに努めた効果が認められる。

【協働の学習】

インターネットの接続状況などで、声が聞き取りにくかったり、映像が途切れたりしたこともあり、否定的な回答をした児童生徒がやや多くなっている。その一方で、教室とは違い発言の機会が平等に与えられることのよさを評価する児童生徒もいた。

【家庭学習】

家庭で学習しなければならない時間が多いため、自分でスケジュールを管理する力が高まったと回答する児童生徒がいる一方で、自己管理が難しかった児童生徒がおり、二極化が見られた。

【授業時間】

1単位時間の接続時間を30分とした。概ね長さについてはちょうど良いと回答していた。ただし、なかなか接続できず時間が過ぎてしまい、授業内容を聞き取れないことがあったと評価する児童生徒もいた。

【主体的な学習態度】

テレビ会議へのログインをはじめとするパソコンの操作に慣れたことをあげていた。個人用のノートPCを貸与され、上学年にいくほどスキルアップが図れた。また、学校の教室での授業と比較してオンライン授業のメリット、デメリットを評価した。オンライン授業を通して、自分がおかれている状況を理解していた。

2. 保護者へのアンケート結果

※詳細は「保護者アンケート結果」参照

学期末の個別面談の際に家庭でのオンライン授業の様子について担任が聞き取った。

1. オンライン授業を受けているお子さんの様子はいかがでしたか
2. オンライン授業を受けている様子をご覧になっていて、心配なことはありますか
3. オンライン授業で、保護者の方が大変だったことは何ですか

3. 教員へのアンケート

※詳細は「教員アンケート結果」参照

1. オンライン授業で難しいと思ったところ
2. 自分の授業について
3. 児童生徒の様子について

4. オンライン授業の有用性

※詳細は「アンケート集計」参照

以上のアンケート結果から、児童生徒、保護者、教員それぞれが、オンライン授業の有用性をどのように感じているか、3つの観点で主観的評価として整理した。

児童生徒	オンライン授業で身に付いた知識・技能は何か	実施教科の教科書の基礎的内容。 オンライン授業ならではの発表する力
	オンライン授業で何ができるようになったか。	ICT 機器の活用能力 (パソコンやタブレットなどの操作)
	オンライン授業の良さは何か	対面ではないので、マスクが不要なこと 動画を視聴したり、資料が大きく提示されたりする。 自宅で学習するなど自己管理能力を高められる。

保護者	オンライン授業で身に付いた知識・技能は何か	情報機器の操作能力
	オンライン授業で何ができるようになったか。	自分で計画を立てて、自主的に学習や課題に取り組む姿勢が高まった。
	オンライン授業の良さは何か	先生や友達に会えて嬉しそうだった。 学校の授業と変わらず楽しんで授業を受けられていたので安心した。 教師の支援によっては、学校よりわかりやすかった内容もあった。

教員	実施前(実施直後)と実施後で指導の仕方に変化したこと	<ul style="list-style-type: none"> ・オンライン授業だからこそできる授業(動画やデジタル教科書など)を多く取り入れて授業を行うようになった。 ・児童生徒が、集中できるように視覚的に考えた授業を行い、質問や意見を多く出させることで、集中できる授業作りを考えた。
	オンライン授業で有効だったソフトや機器	NHK for School, You tube, デジタル教科書, 書画カメラ, web カメラ
	オンライン授業で身に付けさせた知識・技能は何か	<ul style="list-style-type: none"> ・各教科の基礎的な学習内容(主に知識や理解) ・問題解決的な課題は時間的に難しい面があったが、できる限り話し合いの時間を設けた。 ・テストができないので、予習・復習に力を入れ、自分で計画的に学習する力を身に付けさせることに重点をおいた。 ・情報リテラシー 機器の操作だけでなく、ネットのマナーや情報モラルなど

<考察>

○身に付いた知識・技能

これまで以上に情報機器にふれる機会が増えたことで、操作スキルが高まったと言える。この点について三者の評価が一致した。

オンライン授業は、概ね各教科の基礎・基本にあたる内容が多かった。対面授業に比べて時間が短いことや離れた場所にいることなどから短時間で解が得やすい内容になりがちになる。しかし、保護者の中には、内容によってはむしろオンラインに向いているものもあると評価する声もある。

○オンライン授業でできるようになったこと

自宅での学習時間をどう過ごすかに大きな差が生まれた。教師の願いは、「自分で学習する力」を身に付けることにあり、家庭にも協力を求めてきたことで成果として表れている児童生徒がいる。その一方で、個人差、家庭の差が否めない。今後も、いつ非常時が訪れるか分からない今、通常の授業の中でも「自学」を意識した学び方を指導する意識が必要であろう。

○オンライン授業のよさは何か

動画や写真など映像を使って学習する内容に対して児童生徒は良さを感じていた。教員も視覚的な教材を提示することを積極的に行っていた。教員の意図と児童生徒の学習意欲が一致したことになる。ただ見せて終わるのではなく、そこに教師の解説や有意義な話し合いが行われることで理解が深まると考えられる。

アンケート調査まとめ

- ◆オンライン授業を通して、児童生徒の情報機器の操作スキルが高まった。
- ◆オンライン授業では、主に各教科の基礎的・基本的内容を中心に扱った。児童は、自宅で学習の計画を立てて授業に臨み、自主的に学習する時間が増えた。ただし、個人差もある。
- ◆オンライン授業では、視覚的な教材を活用することで、効率的に指導することができる。単元によっては、オンラインの効果が出る授業もある。

○オンライン授業事例集

※詳細は「オンライン授業事例集」参照

誰もが初めてのオンライン授業だったが、小・中学部の連携を生かして1学期に取り組んだ実践を共有し、本校のオンライン授業のノウハウを「オンライン授業事例集」として整理した。コロナ禍で、いつ非常事態が訪れるか分からない中、学びを止めないよう継続して授業を行う方法を常に考えた1年だった。急にオンライン授業に変わっても対応できるよう小・中が協力して時間割を組んだり、授業スタイルや有効な指導法を共有したりした。学校として見通しをもって授業を行うことで保護者の方のご理解やご協力を得ることができた。大がかりな授業ではなく、ちょっとしたアイデアで分かりやすく、楽しく、持続可能な実践をまとめた。学校規模や児童生徒の家庭状況、インフラ整備によって方法は変わるかもしれないが、他の在外教育施設でオンライン授業を行う際の参考になればと考えている。

○研究授業 指導案集

※詳細は「学習指導案集」参照

全学年でICTを活用した研究授業を行った。ほとんどが教室での授業だったが、非常時を想定し、自宅でも同様の学習内容を指導することができるよう工夫した。研究授業を通して、教員のICT活用スキルが高まった。授業を参観することで、それぞれの教員の強みが活かされたり、教科の専門性が高まったりし、互いの研鑽の機会となった。

8. 今後の課題・展望

(※次年度以降への継続性及び発展性に言及してください。)

今年度は1年間、オンライン授業を継続することができた。授業を重ねることで様々なアイデアが生かされ、情報機器の拡充の効果が見られた。子ども達も機器類の操作に慣れ、スキルアップが図られた。次年度以降もオンライン授業を継続するにあたり、次の点が課題としてあげられる。

○授業時間の確保

今年度の始めのネットワークの容量不足に伴い、同時に多数の学級で授業をすることができなかったため、授業時間や時数が限られてしまった。学びの保障という点で、来年は1回の授業時間や1日の授業回数を増やして行く必要がある。授業数が増えることで接続に問題はないか早い段階で確認する必要がある。3学期末に試行し、その結果によって環境の整備を行う。

○各教科のバランス

教科によってオンライン授業が難しいものがある。特に実技教科は、活動が限定される場合がある。しかし、今後も起こりうる非常時に備え、できるだけ教科のバランスをとって時間割を組む必要がある。どの教科も、オンライン授業でできる単元や活動を精選しておき、偏りがないようにする。

○ICTを活用したインタラクティブなやりとり

児童生徒に一人一台の端末が渡されたことで同じ条件で学ぶ環境ができた。今年度は、双方向型のオンライン授業ではあったが、教師から配信する形になりがちだった。児童生徒のアンケートに「先生に聞いてもらえない」という声があったことから、できるだけ児童生徒からの発信を教師が受け止められるようなツールを用いることを視野に入れたい。その1つとしてメールがある。セキュリティや情報モラルなど、安全な使い方を指導した上で活用場面を見出していきたい。

○個別の学習の保障

今年度は、教師がプリント課題を渡して家庭学習としていた。一律の課題のほか、個人差に対応した課題を提供できる学習コンテンツの導入を考えたい。家庭で過ごす時間が多くなると、児童生徒が自分で学習する力を高める必要がある。デジタル教科書やデジタル版のドリルなどは個別の学習支援に有効である。さらに、離れていても教師が個人の学習履歴を把握することができるような学習ツールの利用を展望する。

9. 所感

開校2年目の年、いよいよ本格的な学校づくりが始まろうとした4月。コロナ禍で時が止まってしまったように感じた。これまでの学校で当たり前でできていたことができない事態が起こり、児童生徒の学びをどう保障していくかを真剣に議論した。海外で暮らす児童生徒にとって在外教育施設の役割は大きい。教師の力量が試される1年のスタートとなった。

そんな折、本事業の指定校の任を受け、ICTを活用した教育体制構築事業に乗り出すことになった。短い期間の取組だったか、教師が力と知恵を合わせてオンライン授業や研究授業に取り組んだ。機器類がなかなか手に入りにくい状況の中、どの教室でもICTを活用した授業ができるよう急ピッチで環境を整え、積極的にICTを活用した授業に挑戦した。環境の違う海外であっても日本と同様の学習の機会を保障することが私たち現地教員の使命であると自覚し、目を輝かせて学習する児童生徒の姿にふれることで授業への熱意が高まった。この1年の取組を通してオンライン授業も軌道に乗せることができた。まだまだ課題はあるが、児童生徒の学びを止めないために、教師自身のICT活用指導力を高められるよう研鑽に励みたい。

※提出いただいた報告書や成果物は、本事業の取組成果として公開する予定です。また、記載いただいた内容は文部科学省や海外子女教育振興財団のその他の資料にも使わせていただく可能性があります。